

刊

昭和43年度

春山合宿  
報告書

信州大学山岳会  
長野山岳部

○ 内容説明

1. リーダーの反省、定着、縦走、
2. 行動記録
3. 各係の反省、
4. 各個人反省、

日頃の干渉があまりに、全員の  
務に定着させたい。

8/10/10

10/10

## 春山合宿リーダー反卷

・定着

大野照幸

結果は、以外な方向に向ったが、全体的にみて(定着に於いて)下級生は下級生列に、上級生は上級生なりに、“頼もしい奴等だな”と感心させられたところか、同々有り、今後の成長を期待している。

しかし、大きな失敗もいくつかあった。それらをどうするかは、部の問題でもあり、各個人の内長でもある。要はその結果、又点のみを見て喜んだり、悲観してはいけな。その原因をしっかりと把握し、改め、今後には修正させることである。

最後に、今回起った失敗の大半は“考えること”の不足と“平常の訓練”の不足から起ったものであったことを認識して欲しい。“山に登る”ということをもう少し深く考えて欲しい。

・縦走

大谷 敬

大野定着C.L.より引継いで1日目、今合宿最大のスリップ事故を起し下山を強いられたのは、このことに残念である。

我々が山に登る時、常に死というものに直面しているということも、つぎつぎと見せつけられた合宿であった。1つでも間違えば簡単に人間くらい死んで

しもう。スリッポしかり、ホエアスしかり、ナベしかり、すべてこのことが死に7つながっている。我々には安全登山を目的し、非常に困難なところへは、山行を待たせている。なのにこういう基礎的技術における失敗は、登山者として失格であると言つて過言ではない。山に入った時ぐらいいは細針の注意を払ってほしい。

次に3月26日、生原のスリッポについての原因、反省等リーダー会で話されたこと、私の思っていること等を書く。事故前の状況は、入山前スキーで足をくじいていた。定着のボック時には調子は余りよくなかった。杓子の下りで1度スリッポしている。26日白馬の登りは比較的調子はよかつた。荷重は約35kgである。

まずオ-の原因は荷が重過ぎた。新人には25~30kgで十分25kgに押さえるのが安全だろう。次に彼の技術不足。入山前のけがもある程度影響しているだろう。こゝに、かかいてみると、すべて上級生の責任である。第一の原因は、判断の甘さからくるものである。又すべてのことと考えると、ギルを張ることをしなかったのは最大の反省点である。新人に突いては、大丈夫だろうは通用しない。ギルも持っているだけでは空の持ち残りである。

上級生、下級生ともに反省点の多い合宿であった。これとまかして一歩前進した山行を行つて欲しいものである。

# 行動記録

3月15日 (土) 快晴

## ・コースタイム 行動時間

4:00 essen 起床 岩崎マンション  
5:00 essen  
5:40 部屋着  
6:50 部屋着 マイクロバスにて細野、  
8:30 細野着  
9:00 出発  
9:55 二股着

二股にて設営し、細野までデポ回収と小日向尾根の偵察を行なう

小日向尾根 party 吉野、山田

10:50 二股発  
11:20 } 送水管上部  
11:30 }  
12:20 } 小日向尾根の広い台地  
12:40 }  
12:55 引返す  
1:15 } 送水管上  
1:25 }  
1:40 二股テニ場

細野デポ回収 party

大野、大谷、井口、小林、生原、栗田

10:50 二股発  
11:30 細野着

11:55 細野迄

12:35 二股着

### 本日の感想

長野出発時には、雪もちらつき、雲も引く。天候があやぶまれていたが、目的地に近づくにつれて、天候は回復し、すばらしい春の晴天となる。

二股までは、マイクロバスが入らないので、二股—細野間のダブルボック、小日向尾根の偵察とする。すばらしい晴天も夕方からは、悪くなりだした。明日は春一番がおとすかもしれない気配によると雨の可能性もある。とにかく、早く上に行き、B.C.設営のめどをつけなければ……。

しかし、小日向尾根は、旧雪と新雪とがはさまりしており、ナダレの可能性が大きい。となりの八方尾根には、ナダレの跡は余りない。しかし、純白のハダを見せ、スキー場のマイクが風にのって聞えてくる。定着中は下界の声とは無縁とはいかないであろう。

入山初日から早くも、アカデミックな話が出る。

それにしても細野では、美人(?)のスキューが誰かに話しかけると、信大山岳部も名前だけでなく、その顔も、名実ともに……である。

信大山岳会 バンザイ……

世界の女子諸君 バンザイ……

以上。

3月16日 (日)  
コースタイム

- 4:00 Essen ◎  
直ちにテント撤収 ◎
- 6:05 出発 ◎  
発電所送水管の横より屋根にかかす。
- 7:35 1本 送水管より上部の台地
- 7:35 出発 ◎ ~うす日がさす
- 8:50 1本 昼食
- 9:00 出発
- 9:50 1本 平坦部前の斜面 ⊗  
栗田下山
- 10:40 出発 ⊗
- 11:55 1本 ⊗
- 12:15 出発
- 1:30 1本 ⊗
- 1:45 出発
- 3:00 小P.へヒビ出し 小日向に至る  
小日向 peak 付近

peak 杓子オリ、小コルにてテニ張る。  
雪が かなり降り今日のトレースも残りそう ~~な~~  
にない。  
7:00 ねる。

3月17日 (月) 沈殿く雪のため  
コースタイム

- 4:00 Essen 作り開始
- 5:00 朝食
- 9:15 天気図
- 1:00 ①小日向下りのラッセル (大野、天谷、小林、生原)  
②樺平へのラッセル (山田、吉野、井口)
- ラッセル一時休憩 (小日向下り party)
- 折り返し ( " )
- テント場着 ( " )
- Essen 作り開始

3月18日 (火) 快晴

。コースターム

2:30 Essen 当起床

4:00 朝食

6:30 出発

7:45 1本

8:15 出発

9:15 二股着 栗田合流

10:05 二股発

10:45 1本 送水管取入口

10:55 出発

11:55 1本

12:15 出発

13:30 1本

1:45 出発

2:50 1本

3:10 出発

4:40 小日向山テン場着

帰天後すぐ紅茶をわかし、物体Xの一部を食べる。

3月19日 (水) 薄曇り、後みぞれ

Am 5:30 Essen

ミカ肉、記録をつけ忘れた。

8:00前 出発

約2時肉半 2 pickで樺平に着く

11:25 天幕を張り終え、全員テボ回収に向う。

12:45 packingを終え、再び樺平に向い出発。

荷が1人 約20kgと軽くなったため快調に飛ばす。

Pm 1:20 ~ 35 小休止

2:15 樺平着

ブロック作り

ミルクがあまり出る、うまい。

3月20日 (木) 快晴

5:20 Essen

5:45 ~ 6:00 天気図作成



杓子尾根上部フィックス隊と沈殿組とに分れる。

フィックス隊行動記録

7:05 樺平 B.C. 出発  
8:00 J.P. 下のフィックス点  
8:30 " " 出発  
10:00 杓子岳頂上直下着  
11:00 上部ニヶ所フィックス終了  
11:30 J.P. 下のフィックス終了  
12:20 樺平 B.C. 着

3月21日 (金) 雨 沈殿

3月22日 (土) 風雪強し 沈殿

3月23日 (日) ふぶき 沈殿

3月24日 (月)

デボ隊行動記録 (短波の気象通報で移動高を確認)

7:25 樺平 B.C. 発  
8:00 1本 (北稜アタック隊とトランシーバー交信)  
8:20 出発  
8:45 最初のFIX取り付  
9:55 1本 J.P. トランシーバー交信  
10:20 出発  
11:15 複線 (杓子岳)  
11:55 1本 トランシーバー交信  
12:10 出発  
12:50 白馬山荘着 トランシーバー交信  
2:10 出発  
2:55 1本  
3:00 出発  
3:20 杓子岳  
4:00 1本 トランシーバー交信  
4:10 出発  
4:20 J.P.  
4:45 1本  
4:50 出発  
5:05 樺平 B.C. 着

3月25日 (火) 快晴

行動時間

5:00 Essen  
 7:40 天幕回収  
 8:25 樺平出発  
 8:40 一本出発  
 9:40 一本出発  
 10:05 一本出発  
 10:35 J.P.  
 10:50 一本出発  
 11:16 一本出発  
 11:55 杓子岳  
 12:25 一本出発  
 12:30 一本出発  
 1:20 白馬山荘着  
 天幕張り、ブロック積み。  
 4:00 天気図作成  
 5:00 定着終了コンパ  
 5:30 Essen.

3月26日 (水) 快晴

行動時間

7:00 ○ 白馬山荘テント場発  
 7:20 白馬ピークより三国境への下り斜面で生原滑落。  
 右足上腿部を打撲。大野、吉野ストップしようとして  
 ままにまわれる。吉野、右足にピッケルで刺傷。  
 怪我の午当の後、協議し、大池経由で下山と決定。  
 縦走のエッセン、クレモナを三国境へデブする。  
 10:10 ○ 一本 小蓮華ピーク手前  
 10:20 一本出発  
 11:05 一本出発  
 11:15 ○ 一本 小蓮華の下り。(雪はクラストしていて  
 12:10 一本(白馬大池) アイゼンが良く効く。  
 12:30 一本(天狗原) 雪かくなってきて重い。  
 13:15 ○ 一本(天狗原) 全員フットははきかえる。  
 14:15~30 ○ 一本  
 (成城小屋付近)、小川の水で一息入る。  
 15:30 ○ 馬ノ背リフト最高点着。全員リフトで下降。

白馬鍾ヶ岳北稜記録

1969. 3. 24

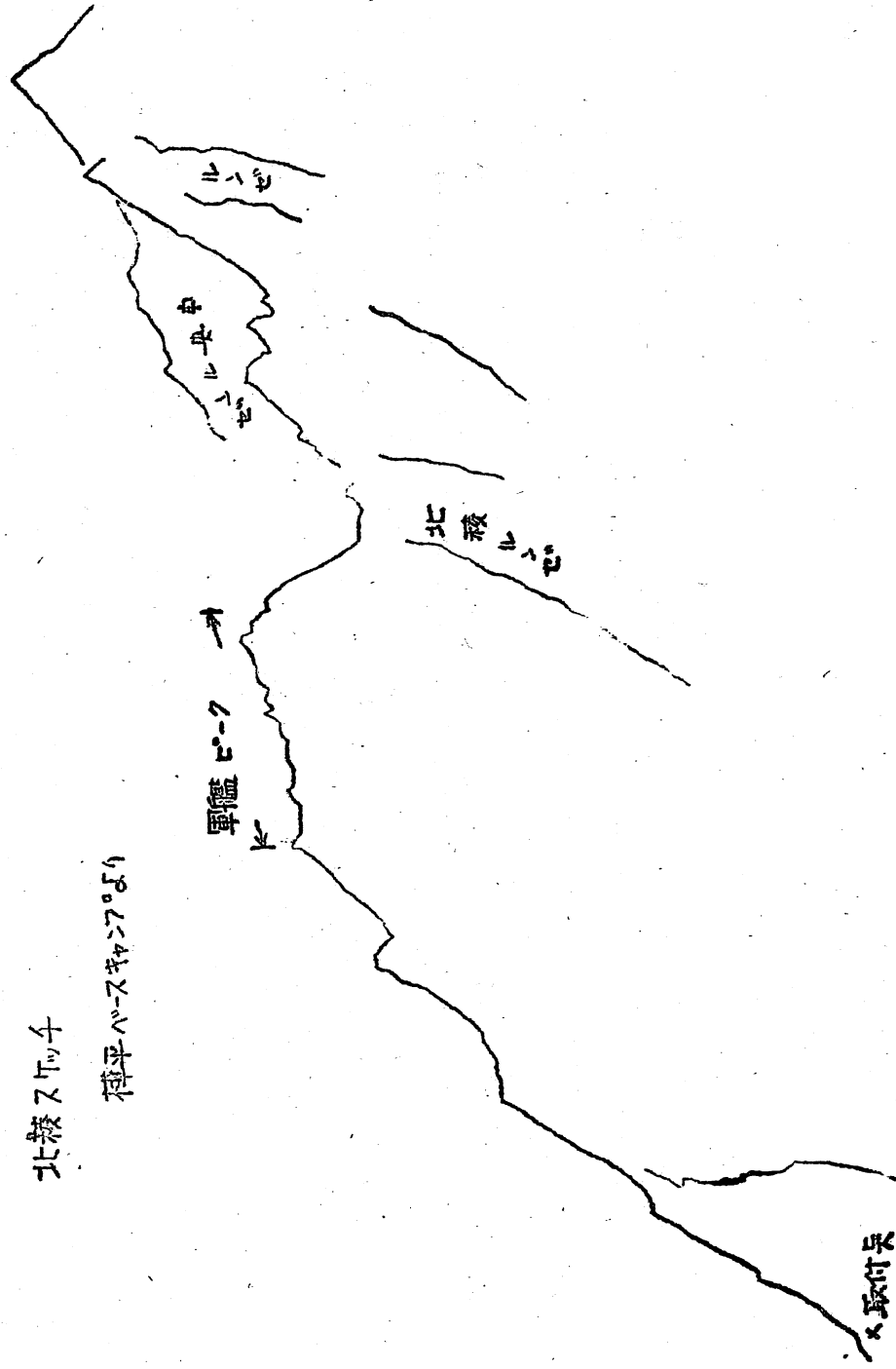
1. 吉野英夫 (エ.エ3)

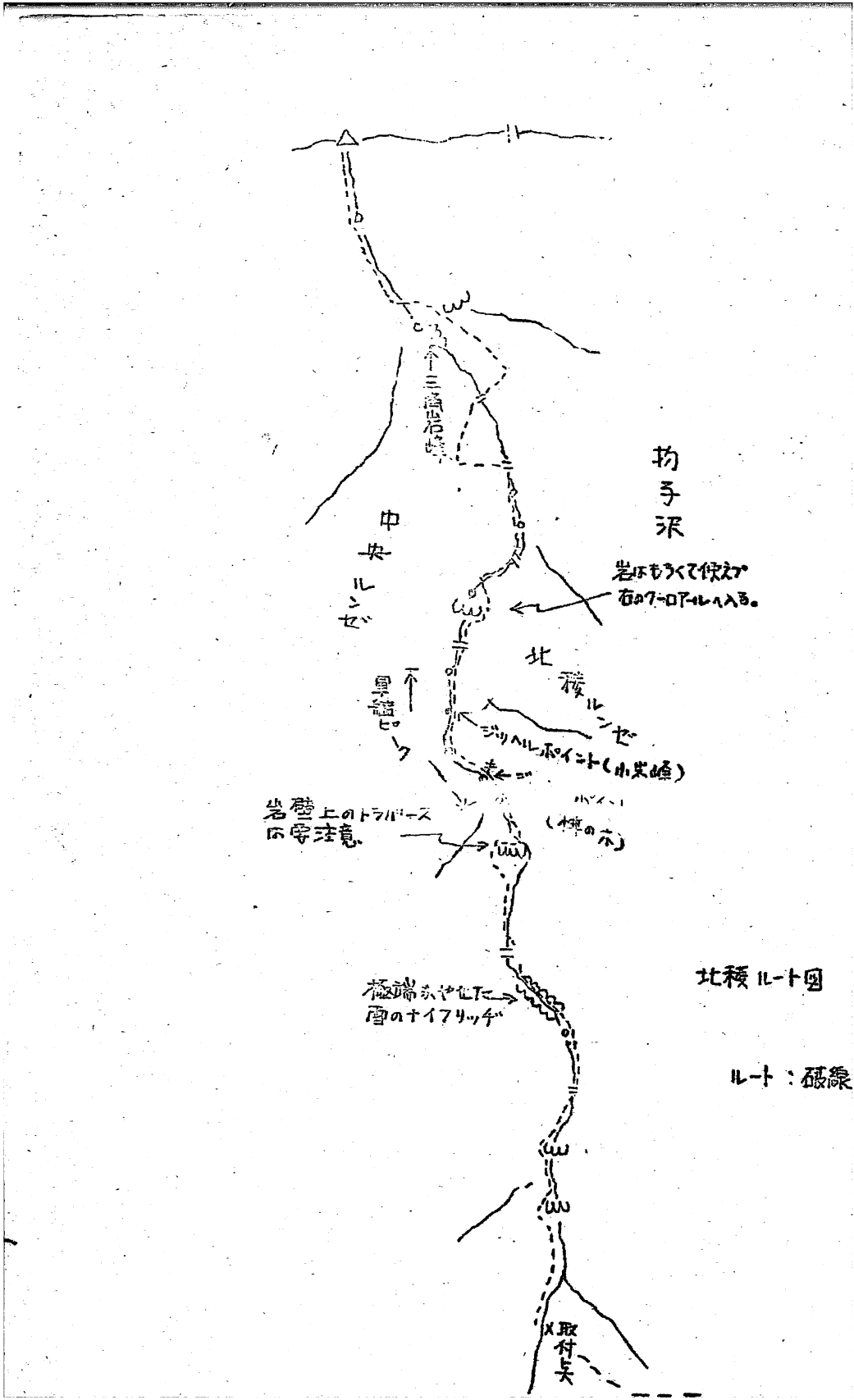
井口隆夫 (エ.エ2)

北稜スルヤ

榎平ハスキャンゾヨリ

白馬鍾頂上



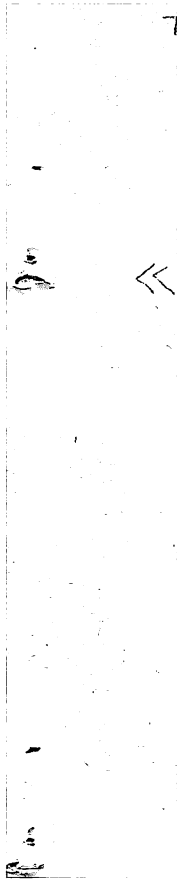


# 記録

北稜の登攀は、全行程が雪の状態に依り左右される。軍艦ピーク周辺はやせた雪稜となり、ツルハシポイントもツルハシのみであるので、ツルハシに注意が必要である。雪壁は小氷河が80°程度の角度があり、安定したバランスが要求される。

1. 北稜末端の台地状地帯より取り付く。雪は早朝の為、着氷しており、登攀が上る。取付兵上の岩の左を巻き、ツルハシ 湿りの雪壁を液状で登攀して行く。この辺りは4ハシ間の雪壁の連続である。(ほとんど垂直である。) アンソイルンの后、カマインクを交えつゝ、山ピークに立つ。この辺り約100m程にわたる雪尻上の雪稜となっている。中央稜側をトラバース気味に通過する。日射の為、不安定な雪に気を付けてコロイ着く。ここから雪壁ピークが始まる。左の急なルンゼをつめ、稜線左の岩の上をトラバースして稜線に立つ。(この付近は雪尻が右側側に張り出している。) 約80m (ツルハシポイント) はツルハシの生えた雪壁の連続である。雪尻は貝殻のクラストに右側側面を使ってこなす。
2. さて軍艦ピークの核心になるが、先が見事な雪と岩のタイフにびっくりせられる。安室はツルハシポイントより山岩峰の上より右側斜面(稜線より100m)の樺の木、40m (ツルハシポイント) 先、顕著な岩峰のみである。ツルハシで終了。全体の感じはカミヤリの刃を、ツルハシを思っていたけれど、山は良い。ギアアップから下り、樺をピンにしてアンソイルンで下降。(20m) この方も中央ルンゼの下り下り出ると、先へ稜線を下りる。
3. 標高より、最も高いピークは岩がもろくて登山が、北稜ルンゼ上部の7-0Pへ入り、再び稜線へ出る。さらに2つの山ピークを降して(この付近は稜線もなくコンテで通過) コルより中央ルンゼへ下降。上部の三角岩峰を目指してコンテを続ける。最上部より北稜をまたいで右側ルンゼに入る。このルンゼは北稜ルンゼと手行しており、B.C.より判別出来る。ルンゼをつめて再び稜線に立ち、金剛頂上への雪稜をのぼる。

6:20 B.C. 出。  
8:00 取付兵。  
2:10 山ピーク



# 反省の各係

食糧・梱包係の反省  
 食糧 栄計む宿にと計うを積しんてもかすさ象冬し天うて氣  
 梱包 重まいけし限を見令期もと一か響最でパッ合春因思ず配  
 係 食て利水しなてあり入ラ希入集てパッ集ン  
 量の立う雑まらしも取にバズルきしももキ宿山取てて置  
 養画とに達は算意元雪てニボて影らつん係山て氣とニ圧  
 記 雑とたあ栄やの積とつたにすこズいまで  
 水燃積る養すで雪し時Essen 梱まれクもおしよ  
 中が期と破しなにこ少計のてバ出まび  
 心少にけ取てりはれ々画たかキし毎し  
 になおう士カかこ無をめらんでほま  
 Essen 論るりいら無までザわに前し替  
 合給れ口とりら理立のあグ事少す  
 係だるくは  
 肉蔵だるど  
 きたるみ山  
 とり来て着  
 こて出いと  
 たぎま書山  
 不過まで冬  
 であもしい山  
 傷考で山在着  
 象に内入け  
 記 杯か水ま当しの良次らが富 おでもやこが  
 小美難り要必応もたもすにすか中でしたく記奇易トぎ書  
 觀たああた一のしで一ま日次めグかた原生安ニりにて  
 のしもままがるまりのテいはたるン存し生小玉テが様  
 費ま是はた。りみり入るエ望手めくキめグ 時宿位たう思  
 係 食て利水しなてあり入ラ希入集てパッ集ン  
 量の立う雑まらしも取にバズルきしももキ宿山取てて置  
 養画とに達は算意元雪てニボて影らつん係山て氣とニ圧  
 記 雑とたあ栄やの積とつたにすこズいまで  
 水燃積る養すで雪し時Essen 梱まれクもおしよ  
 中が期と破しなにこ少計のてバ出まび  
 心少にけ取てりはれ々画たかキし毎し  
 になおう士カかこ無をめらんでほま  
 Essen 論るりいら無までザわに前し替  
 合給れ口とりら理立のあグ事少す  
 係だるくは  
 肉蔵だるど  
 きたるみ山  
 とり来て着  
 こて出いと  
 たぎま書山  
 不過まで冬  
 であもしい山  
 傷考で山在着  
 象に内入け

なのだ。入山五日、向程前位から天気回復、取り  
はヤ、ていたのだが、やはり小生の壽  
れた銃、枚数が少、な、精だ、新人合宿位まで  
には書ける様に、な、を、け、れ、ば、い、い、今  
合宿の計画では、気、温、は、向、向、種、雲、向、を  
ど出来るだけ多くの機会をと、ら、え、て、調、べ  
る事にな、て、いたのだが、ズ、ク、不、足、の、た、め、気  
温位しか調べな、か、た、を、れ、も、測、定、回、数、が、少  
な、か、た、精、け、を、く、思、て、い、る、小、生、の、山、(自、分)  
に、対、す、る、考、え、の、甘、さ、の、あ、ら、わ、れ、が、あ、る、

<装備>

栗田昭夫

まずテントのことで「入山前まで」はっきりせず、暗闇に迷  
惑をかけてしまった事をおわびしたい。二張持て行く  
予定も1張に変更せざるを得なかった。このテントのことで  
が内張は持参しなかったが、撤収時のわずらわしさもなく、又  
りれ居の寒さを感じず、思っていたよりも Good conditionであ  
った。(雨の不夕和夕は別として、)

エッセル袋、小物袋は、もっとしっかりしたものが欲しい。完があ  
いたりすると合宿中では、どうゆう処、置がやりにくく、その持ちに  
はちだめらです。入山中予備のピッケルが、かんたんに折  
れてしまったが、これは管理、系、検、二問題があったようだ。予備の  
ピッケルが、いとも簡単に使用不能では困る。入山前入念に調べておくべき  
であった。とかく予備ピッケルは無雑作に選んで持っていきやすいので  
ニ水からは注意しよう。入山中一番大きな失敗はナベと吹飛ばされたこと  
だ。自分の考えにとらわれず、先輩の注意にもっと耳を傾けよう。器用  
な取り扱いは、な、ど、が、一、年、生、は、ま、だ、ま、だ、ザ、ッ、イ、合、宿、の、ピ、ケ、ル、は、一、日、の、



# 医療

縦走をするということでも薬品等むやみやたらにあれもこれもということを選けて、一年にまとめた。又、attack用の分も極めて小さなものを用意した。

合宿中、特に使ったものはヤールバンとスリップ事故のときの包帯、セーブル、ガーゼ、ペニシリン軟膏くらいである。いろいろな事態について考えておかねばならないけど、そのことについては1~2回程程度のことを考えておけばよいと思う。

参加者の入山前の健康管理はこゝで改めて銘記すべきであろう。体調は万全に整えておくべきであろう。

## 会計

1. 収入	56000 円	
(内訳) 6700 X 7 = 46900		(合宿費、山田、大野、大谷、井口、生原、栗田、小林)
4500 X 1 = 4500		(合宿費 吉野)
600 X 4 = 2400		(不参加者、駒井、吉野、荒井、小杉)
600 X 1 = 600		(交通費 吉野)
200 X 8 = 1600		(合宿後徴収 参加者全員)

2 支出	55508 円		
① 食糧費	33377 円		
② 装備費	5760 円		
(内訳)			
電池	720	マジック	50
天気図	150	ゴムテープ	80
ゴムテープ	640	ガソリン	2180
D-ツク	960	クレタ	140
携燃	100	ノット	50
赤布	120	メタ	570
③ 交通費	14160 円		
(内訳)			
マイクロバス		長野→細野	5150
		親原→長野	5010

4) 予備費  
(内訳)

	2211円	
交通費	長野↔松本(市内バス含)	520
電話	長野→松本	147
	長野→大町(2回)	112
	親原→回ッ谷	52
点眼薬		180
荷物運代(細野)		100
遣対費		1100

結局492円の黒字となりました。

$$56000 - 55508 = 492$$

この492円は郵費に存ります。

荒井

たづね、残つた下と心登  
ゴラズ思が帰算。ソッがけ  
たワキとたに十たホッけた  
ゴ。でかっ家何一応たる  
がたかの思。であ一さき  
方一此りとた子でしで  
のかをなかつ杓配のびに  
家をがらきか旬心たわ山  
と、した入る下とつたのぶ  
と山いけすら月かつ及  
と入てだ山か三かなまの  
二為一今入わ。さら一カ  
たの思自ずもたまの、  
っ点と、エか、つたも、  
あ二うがにいなは何る自  
どのるた氣にに時も、  
配とヤもて氣たにて日、  
配こも伝何しが見南し日、  
かたご手りうとで新とみ  
チっ何をほどこ南もツ休  
マあが備や又の新に一は  
少で何準。ずなとビボラ  
リュ配はのたらんたレてか  
た心南前つならみあてや  
でが年山かもしあてやこ  
ぞ方一入しにはがぎを。こ  
山のり、びうや崩す部る。  
冬を時た。わど、雪を部る。  
はてた。わど、雪を部る。  
宿はた。わど、雪を部る。  
合て入。あ當では大日。今、  
今しに念と自てリ山し。残  
ちらうと思。

小杉

な論、参かホッた  
得勿も不まにこに  
を。し宿感今山  
むかす合迷多山  
やう必に憂も精  
はる。是大困純  
調あがにに程、  
不ざる前様のし程、  
の川お宿皆速有回  
体よか今の完は今  
身ら要、負不向。  
か。た必身、負不向。  
う処了自の合を、  
る対り自他。悩は  
あどう切。ずん。頭は  
ぞどう切。ずん。頭は  
態は頭か果りでに思  
状に頭は果りでに思  
う迫とは全が対がし  
う在題ををにちま  
う的向の任に山持や  
ど精神の責を山持や  
は精界の責を山持や  
と下來がむすうら  
けが下來がむすうら  
心掛るには出たの思  
のどあるにしましと  
へのはよ決したと  
宿もにの決したと  
合い山の如けに山け

生原

かすの。目故のたす対交  
な動自まがア技あ要分十  
し行分りてッてで。自き  
今て自て金リッ傷る。つ  
十一くつとスも豪あさに  
を切全思このま氣で甘と  
てい、くす回身、足るこ  
当思はま為二。生不すの  
手、と認。す。小杉対こ  
のりこししす。では録に後  
を字た申たまのでの山今  
、にけにっも宿りの  
き氣かとあてた合取生る。  
じしをここごったの團小あ  
く少惑ま足思起度気くです。  
首とにどクなから。た  
足こ一精でけ足かたて  
てのテた、情不れかたて  
をしも一もで術をかおし思  
をもパかては技。なに満  
一から、甘し威のたけ般充  
キかてがに生し考全ト  
スでっ方勤職小手に宿中ら  
甲しかえ行たくり足念のな  
27山を考の全か満山心ば  
月入さる中のはわも着がれ  
前め、が対合るりさ気産甘な  
入たこ山まに重かす省



## 井口隆夫

この合宿程向題の多岐たるものは他になからう。それと個々に向うのでは総括して反省したい。山行(特に合宿)に於て我々は常に集団としてリーダー権の絶対性を侵しては来ないと思ふ。過去に致えられた。しかし今回 それに多分に疑問を持たざるを得なかつた。それを縦の關係としてとらえても、横のものととらえても個々の内的不安感を生ぜしめたことは間違いないと思ふ。この状態を内包したまま山行を行い、部活動を行う時、結果は極めて明らかだと思ふ。即ち部及び我々の"山"、そのものの崩壊を原体験とせざるを得なくなる。他の問題としてその起因を従つて個人的なものにしてより本質的なものを見出す事は許されなかつたと思ふ。如何に社会的、時代的条件の変化があつても"山"には普遍なる条件がある。山行(直接的にピクニック)のみを自己目的化してその追求に終始するのは極めて表層的な今日の存在と云わざるを得ない。個々のアルビニズムの即時的物質化、その集団構成員の集団意識、指導部の全能的寡頭制等々、我々が極く容易に認知し得るものが、意識的、無意識的に欠落している時、最早や合宿(集団山行)は本質的層を内包する必然として意義を失なう。この点から見たる山行の爲に個々のアルビニズム、行"オーグ"の主體的確立、都合宿の形態(時代即応的な)の再考を行なつたいと思ふ。おこがましいが"山"は単に「おつかい」「せいものではない」という言葉に表現し得る程薄く軽いものではないと思ふ。我々が人生の最も充実した(暗黒が知らぬが)時期の現在を賭けるのであるから、(異体性の交りた文で)由り認められん。許して(下)

## 小林 真和

今度春山合宿に参加して自分のズクの無さには、  
ほとほといやになった。というも体カは人に劣らな  
いつもりだが、人が体カの限界を越えフラフラにな  
りながら執念でラッセルするのに私はというと、  
ちよと息切れするとすぐ交代という有様。何と耐え  
けないことか。これから個人山行を重ねて執念  
でラッセルなとて続行できるようにしたいと思て  
います。また山行には欠かせない天気図作製  
を新人合宿までには迅速かつ正確にできるように  
したい。ところで春山合宿全体を見て続走でき  
なかつたことは大変残念でみたが、非常に楽しい  
山行をさせていただきました。

## 大谷 敬

楽しい山行であった。春はもちろん冬あり夏あり、  
梅雨ありこんなバラエティに富んだ天気。残念な山  
行であった。スリッパ事故、ナベ、ホエブス、途中  
下山。面白い山行であった。ペッペッペー、  
ジジジー、アチチー。しんどい山行であった。  
栂子から白馬山荘までが。小キジのよく出た  
山行であった。最低1日4回。時には7回も。  
エライスマヘンオ。ゴメンヤ、シヤ。  
雪の上にも三年。山は雪。切るに切れぬ関係  
になってしまった。

# 春山合宿雑感

吉野英夫

今度の合宿は、山岳部に入部して以来、数々の合宿を経験してきたが、計画としては、もっとも期待の多いものであった。これは、三年間の冬の合宿では、自分の登山技術の成果、また、大雪山岳部の持ちこたえた山行という事を十分に盛り込んだ合宿であらうと思う。

杓子東麓、白馬釜比叢のアタックと白馬以北の稜線をはな海まで縦走、これは、我々大雪山岳部の立場、構成を十分に生かしたものである。大雪山岳部は長期間の休み、これと、新人から4年までの構成、これを考えれば、我々大雪山岳部に所属する者全員の力の結集としての合宿の持ちこたえ方も定まって来るはずである。各部門に合ったルート、壁の形、また短い年代において、一人前の登山家となるためには、より多くの時間をかけて、各人がじっくりと山の「アトコ」に入って考える。大雪山岳部にはかたがた山行の持ちこたえ方である。そして、山岳部員は、自分自身の経験、技術を生かしてさらに深く、濃い登山技術を体得するに心をかけなければならぬ。

このためにも、今回の合宿形式は、自分なりに考え、我々には、まことに合った合宿であらうと思う。しかし、現実

には、合宿も半分で終わらざるを得なかった。これは、種々の原因が反者として出されたが、しかし、この果に「おぼた」我々が「反者」なわけは「なすな」面があると考え次第である。

我々大学山岳部員は何を考へ、何を思ふべきなのか。現在、登山思想は、乱立している。大学山岳部員として、登山している中、その他の人間では、本質は、山を「目ざし」、その行動を通し、自分自身で何かを「おぼた」する態度がある。この時、忘れてはならないことは、それを行動に出るとき、自分自身の立場、また自分自身の能力に対し、冷静、かつ謙虚でなければならぬ。

また、目ざす「登山」、山を常に前向きに与える態度を保持したい。

現在、信州大学山岳会も、ネパールの7000m峰を「目ざす」としている。また、これは、利高し、長大な登攀が目標となっていくであろう。この時、我々山岳部員も、国内に於いてどのような山行を持っていくか。利団難で、長い登攀を「目ざし」、その登攀もより確実に、また安全な心になければならぬ。国内の3000mは果敢、ネパールのマラヤには7000~8000mの山は、沢山あり、今後のネパール・マラヤ等における登山は、オーソドックスな方向性。



より困難なバリエーションの登攀となることをわかってる。  
我々山岳部員も、もっと強い情熱を持って、山登りの持つ  
種々の面白さ、一つ一つに努力を傾け、自分のものとしなければなら  
ない。11月号でたっても、何も出来なく、上級生に注意さ  
れるのではなく、自分の力を経験を生かして、自分なりに  
向上しなければならぬ、そして、信州大学山岳会の上級生  
とつながり、登山技術の各方面に一応の力量を有して  
いなければならぬ。そうしなければ、大学山岳部の  
持つ大きな欠点である、経験不足は、さらに大きくなり、より  
危険をはらんで行くであろう。このことをよく考えて欲しい。  
現在の各部員は、山に対する目が不足しているのではなか  
らぬ、山岳部活動に気をとらなければならない。

今回の春山合宿の事故も、こうした山に対する厳しさに  
欠けている面が非常に大きい。これは欠けているのに、  
登山技術、指導方針などのと反対に、全くのさうじやう  
である。各自がもっともよくよく反省しなければなら  
ない。それぞれの関係なく、全く何人の内にある中ので  
ある。これを生かすしなければ、山岳部のこれからの活  
動は衰退の一途をたどることを断言出来る。

山登りに対して、このくらいよくよく考えてこそ、11月号は

登山活動が生きかえり来ると考える。

春山合宿の事故を考えた上で、我々部員が、非常に弱い  
ところがあると思う。これを生かすも、殺すも、各自の大  
いなる反省の努力に期待するものである。

この報告が流れる時、皆が新しい、一年上の部員  
として活動していると思うが、流さない部員が多く、流れる  
つくる部員と成って欲しいものである。

春山は、スリッパ事故があったが、これと、僕の作  
った春山合宿の型式……等、全体を通し、何か自分に不足し  
た、何を持っているかを充分考えて欲しい。

—終り—

春山合宿反省

山田正弘

今日の春山合宿は、事故の為途中下山の形で終ってし  
まった。反省会に於て、色々反省点が出たが、その中の一つ  
は、荷量の内題に於て、その時重量が重たという事が、出て、又、  
D.B.の方をにも指通されたが、これ等入山前にリーダー層が細か  
く検討しておくべきだろう。いつかこんな内題を再びか  
しに於てはと言わぬまでも、"まあどうせいつもの事だ"と  
いった気持ちで入山するのが、弊にはなっている。

登山の社会的に位置づけられている点、大学の活動

のあり方、会場の意義、またこれと土記の内題点とは無関係  
が分かる。

日常初会、あるいは他の機会に皆のコミュニケーションを  
通して、あせらす「登山」というものを考えたものである。

— 山田 記 —

